

令和6年度 府中明郷学園 教育研究推進計画

1 学校教育目標

自主・協働・創造

～社会に開かれた教育課程の推進により、自ら課題を見つけ、学び、行動する児童生徒の育成～

【目指す児童生徒像】

怨の心を持ち、夢と志を抱き、自らを鍛え互いを鍛える児童生徒

※人の心を自分の心の如（ごと）く思いやる

2 研究主題

未来を創造する力の育成

～自ら考え、伝え合い、深め合う学習活動を通して～

3 研究主題について

将来の予測困難なVUCA（「Volatility:変動性」「Uncertainty:不確実性」「Complexity:複雑性」「Ambiguity:曖昧性」）の時代、人口減少、少子高齢化、国や社会に対する意識の低下など、予測困難な世の中で、教育を通じたウェルビーイングの向上が叫ばれている。激動する現代社会においては、様々な情報を見極めて課題を発見し、その解決に向けて異なる多様な他者と協働しながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力をもった人材が求められている。また、様々な知識や情報を活用・統合しながら自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力をもった人材が求められている。すなわち、他者と協働しながら、よりよい社会を創るために新しい価値を創造し、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識をもった児童生徒の育成が求められている。また、新しい時代を切り拓いていくためには、学校が社会や世界と接点をもちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学ぶことのできる、社会に開かれた教育課程が重要となる。そして学力＝「未来を創る力」の基礎と捉えると、児童生徒が主体的・協働的に学びの地図を描き、広げ、歩んでいくことは、深い学びそのものであると考える。

3年間のキャリア教育推進地域指定事業で、キャリア教育で身に付けたい力である「基礎的・汎用的能力」を軸として、育成を目指す資質・能力を精査し、児童生徒と共有化した。その資質・能力が身に付いたかどうかを振り返り、根拠を明確にすることで、学びを自覚できるような授業づくりに取り組んだ結果、学びにつながりが生まれ、学びに向かう力も高まってきた。一方、児童生徒がキャリアプランニング能力を汎用的に発揮することや基礎学力に課題がある。

この課題を解決するため、自ら考え、伝え合い、深め合う活動を通して、精査した資質・能力を児童生徒がどの教科・領域でも意識したり、発揮したりすることができるような授業づくりを目指す。また、基礎学力向上を目指して、府中市ならではの「ことば探究科」での学びを充実させることや、児童生徒（教師）の問い（発問）の質を高める授業力の向上を目指す。そのために、本校の特色を生かした地域や産業界との連携によるキャリア教育のさらなる充実と本質的な問いを深く考えた教材研究による授業づくりにより教育の質的向上を図る。「キャリア教育の充実」では、生活科及び総合的な学習の時間を中心として取り組み、育成を目指す資質・能力として評価する。「授業づくり」では、学習内容の理解度、定着度の向上のための「問いの3つの階層※広島県教育資料で推進する授業改善を進める。各教科のコンテンツ（知識）ベースの「知識伝達型」ではなく、コンピテンシー（能力）ベースの「主体的な学び」へ転換した研究を進める。これらの取組みは、学力＝「未来を創る力」の基礎を養い、児童生徒の主体的・協働的に深い学びをさらに促進すると考える。

4 研究仮説

児童生徒が自ら考え、伝え合い、深め合う学習活動に取り組めば、学力の定着と向上につながるだろう。

5 本校で身に付けたい資質・能力

4つに精選し、振り返りの視点とする。

| 項目 | 目指す資質・能力 |
|----|------------------------|
| ① | 他者（ひと）とうまくやっていく力（オレンジ） |
| ② | 自己（じぶん）を磨く力（ピンク） |
| ③ | 課題（かべ）を乗り越える力（青色） |
| ④ | 未来（さき）へつなげる力（黄緑色） |

※本校で身に付けたい資質・能力について年度初めに

①昨年度の児童生徒アンケートから、特に高めたい力を設定する。

②文言で整理し、具体的な目標として児童生徒と共有化を図る。

6 研究の内容

(1) 学力の定着と向上を目指す授業づくり

問いの3つの階層で推進する授業改善に取り組み、資質・能力を育成する。

① 本質的な問いによる授業改善

ア 単元開発の3つの視点

(ア) 主体的な学びの充実

- ・見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って学びの過程を充実させ、確かな学力を育成していく。
- ・単元を貫く問い※広島県教育資料を設定し、単元を通して見取る評価規準を作成する。
- ・市学校一斉学力調査、全国学力・学習状況調査及びプレテスト等を踏まえ、児童生徒のつまづきを把握し、個別の問い※広島県教育資料を引き出した授業づくりを行う。導入の工夫、課題設定の工夫を行うことで、児童生徒が学習意欲を持続し自ら課題解決に迫る授業づくりを行う。

(イ) 協働的な学びの充実

- ・思考ツール等を活用して学びを可視化し、他者との関わりや外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める学びの過程を具現していく。

(ウ) 学びの自覚化

- ・自らの学習活動を振り返り、自分の言葉で書くことによって、学んだことを自ら意味付けたり価値付けたりできるようにしていく。

【振り返りの視点】と=友達 り=理由 わ=わかったこと か=活用 も=もっと

① 友達の考えから学んだこと

② 学習の方法でうまくいったことや失敗したことなどの理由

③ わかったこと

④ ふだんの生活に生かすこと

⑤ もっと考えてみたいこと、もっと調べてみたいこと、もっと工夫してみたいこと

- ・振り返りの視点は「と・り・わ・か・も」にとどまらず、新しい振り返りの視点を児童生徒自らが見出し、学びの意味付けや価値付けをしている。

イ 教材解釈・教材研究

- ・身に付けさせたい力を基に、授業者自身が教材を丁寧に分析する。

- ・校内授業研究会の事前研修の際、教材をどう捉え、解釈しているのか共有する。

ウ C評価の児童生徒への支援

- ・レディネステスト等から現状を把握し、誰もが学びに向かうことができるよう発問を工夫する。
- ・配慮が必要な児童生徒の実態に応じた具体的な手立てや支援を行う。

② 情報活用力とコミュニケーション能力を身に付けるためのグループ活動

ア ICTの活用

Chromebookを自己表現のツールとして活用する。ロイロノート内の思考ツールを活用する等、情報や自分と他者との考えを整理し、アウトプットする活動を積極的に取り入れる。

イ 生活班と教科学習班の連動（特に後期課程）

- ・定期的な班替えて、生活班と学習班の動きがリンクするようにする。
- ・発言できない児童生徒が、自信をもって発言できるようにする。

③ 自己の学びを振り返る場の推進

ア 各教科における授業の振り返り

各教科振り返りシート及び授業ノートを用いた振り返りを行う。単元を通して、自らの学びの振り返りを行う。（本校の振り返りの視点【と・り・わ・か・も】）

イ 道徳ノートの活用

道徳ノートに中心発問とその時間の振り返りを書き、自分が以前書いたことを読み返し、考え方（道徳的価値）の変容に気づかせる。

ウ 学びの時間の確保

- ・授業後の感想や毎日の振り返りを「学びのカード」としてロイロノートに記入し、学びを蓄積させていく。その際も、振り返りの視点【と・り・わ・か・も】を意識させ、入力させる。ロイロノートの活用により、児童生徒同士の意見共有の場を確保しやすくする。（ただし、1年生（3学期）・2年生は手書き用のワークシートで「学びのカード」を書かせることから実施し、実態に応じてロイロノートへの記入に挑戦する。）
- ・毎月末、作文シートを綴ったり、学びの足あとを記入したりし、児童生徒に内省的に自己の学びを振り返らせることで、自らの学びを自覚させる。

④ 基礎学力の育成（表現を支える語彙・語句を増やす指導）

ア 朝読書・朝学習（8:20-8:25を朝の会とし、8:25-8:35の10分間を朝読書・朝学習とする）

※前期課程は、「コグトレ（東洋館出版社）」を基に、作成したプリントやタブレットドリルを行う。（※別紙起案）

※後期は、月曜日・水曜日・金曜日に、各学年・教科の必要に応じたプリント学習等を行う。

※9年生は、セミナー学習（2月末から8年生もセミナー学習）を行う。

イ 帰りの会

- ・「学びのカード」に記入する。

・文章読解 ・読書 ・ひらがな、カタカナ、漢字の書き取り ・意味調べ（国語辞書）、漢字調べ（漢和辞典） ・ことわざ、慣用句、俳句等の暗唱や音読 ・音読 ・計算問題・読解など

ウ ぐんぐんタイム

帰りの会終了後、下校時間まで行う。

- ・前期：学びのカードの記入 → 国語・算数を中心とした学習
- ・7・8年：学びのカードの記入 → 各教科の基礎学力向上のための学習orタブレットドリル
- ・9年：学びのカードの記入 → セミナー学習orタブレットドリル

・文章読解 ・読書 ・漢字の書き取り ・意味調べ ・ことわざ、慣用句、俳句、古典等の暗唱や音読 ・音読 ・計算問題・英単語、英文法など

※ぐんぐんタイムの目安時間（分）

| 学年 | 月 | 火 <small>委員会・サポート活動の際は無し</small> | 水 | 木 | 金 |
|----|----|-------------------------------------|----|---|----|
| 1年 | 15 | | 15 | | 15 |
| 2年 | 15 | | 15 | | 30 |
| 3年 | 25 | | 25 | | 15 |
| 4年 | 25 | | 25 | | 30 |
| 5年 | 10 | 15 | 10 | | 10 |
| 6年 | 10 | 15 | 10 | | 10 |
| 7年 | 10 | 15 | 10 | | 10 |
| 8年 | 10 | 15 | 10 | | 10 |
| 9年 | 10 | 15 | 10 | | 10 |

5-6 時間目終了後の流れ：休憩→学びのカード→各学年の学習→帰りの準備・会

※後期課程…連絡帳

(2) キャリア教育の充実のための生活科及び総合的な学習の時間の実施

社会に開かれた教育課程の実現及び「未来を創る力」の育成を目指して、生活科及び総合的な学習の時間を工夫する。

① 9年間を見通した単元開発のポイント

- ア 生活科及び総合的な学習の時間を中心に教科等横断的で、より探究的な学習となること
- イ 「課題発見・解決学習」の6つの学習過程（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・創造・表現、実行、振り返り）を位置付けること
- ウ 地域と協働し、地域に貢献・参画する学習活動を取り入れること
- エ 本校が設定した資質・能力の育成を図り、資質・能力そのものを考えさせる活動を取り入れること

② 単元における育成したい資質・能力の手立てと評価

生活科・総合的な学習の時間において、資質・能力を評価の観点に位置付け、評価規準を明文化し評価する。

(3) 教科担任制

授業の質の向上と学習内容の理解度・定着度を向上、また、前期・後期課程の円滑な接続を目指して教科担任制を導入する。

- ・前期課程における専科教諭の配置
- ・前期課程における後期課程教員による教科担任制の導入

7 検証の視点

- (1) 令和6年度全国学力・学習状況調査（4月）の実施と推移、市学校一斉学力調査の実施（年2回）
（目標値：正答率30%未満が15%）
- (2) 本校で育成したい資質・能力のアンケート調査の実施と推移（4月・7月・2月）
（目標値：肯定的評価の割合が80%）

(3) 授業観察者の評価シート調査の実施と推移（授業研究・研修の月）

（目標値：肯定的評価の割合が75%）

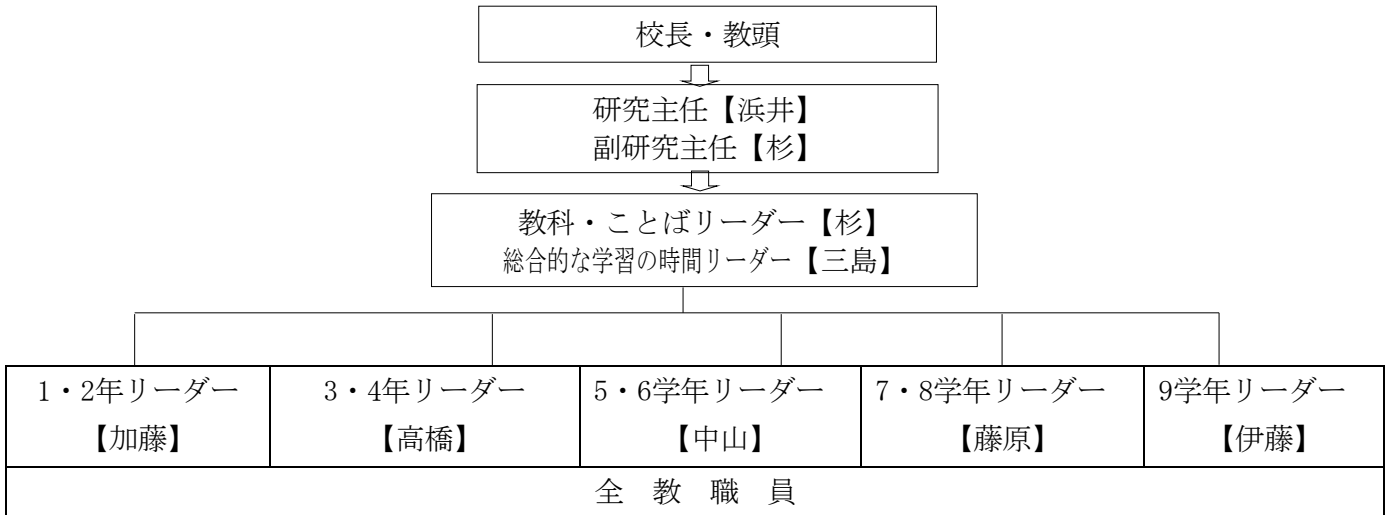
(4) i-check（府中市）の実施と推移

（目標値：「自己肯定感」に関する項目において肯定的評価の割合が70%）

8 研究組織体制

(1) 校長・教頭・教育研究部を中心とした計画的な授業研究

(2) 教科リーダー、キャリア教育リーダーを設置した研究体制の強化



9 研修について

(1) 授業モデルの構築（別紙）

〈授業モデルの原理・原則〉 個と集団の有機的な関連を図り、自己内対話を促す。

- ① 一人一人が、自分事として教材・題材に向き合い、自分の考えを持つ（個の視点）
- ② 自分の考えをもって学び合いに参加する（集団の視点）
- ③ 自分の考えを他者の考えと比較、関係付け、統合などしながら練り直す（集団の視点）
- ④ 練り直した考え（新たな価値）で、教材・題材と向き直し、学びを深める（個の視点）

(2) 研修の進め方

- ・全体研修は、各教科（ことば探究科を含む）、総合的な学習の時間の授業研究を通して各学年1本ずつ行う。
- ・授業研修では、事前研修・模擬授業・事後研修を通して、教職員の学びを深める。
- ・授業研修後は、研修での学びを日々の授業に生かす。

10 授業研究について

授業研究・研修に対する共通理解を深める。

- | | | | | |
|----------------------|-----------|------|----|-----------|
| (1) 第1回授業研究 | 6月11日（火） | 前期課程 | 5年 | ことば探究科 |
| (2) 第2回授業研究 | 6月13日（木） | 前期課程 | 6年 | 総合的な学習の時間 |
| (3) 小中一貫教育全国サミットin府中 | 9月27日（金） | 前期課程 | 4年 | 後期課程 8年 |
| | | 前期課程 | 3年 | 後期課程 9年 |
| (4) 第4回授業研究 | 10月17日（木） | 後期課程 | 7年 | 数学科 |
| (5) 第5回授業研究 | 11月14日（木） | 前期課程 | 2年 | 算数科 |

- ・全体授業研究ではない前期・後期課程校内授業研修においても、前期・後期の枠を超えて授業研修に参加できるよう、授業研究は原則として部活動休業日に設定し、授業づくり・授業改善に生かす。

11 9年間教育の取組

- (1) 前・後期課程9年間を見通した、一貫性のある指導になるよう工夫・改善を行う。

前期課程における後期課程教員による教科担任制の導入

- (2) 府中明郷学園9年間教育大綱の進捗状況の把握と改善策を考え、指導に活かす。

学校評価システムを活用した指導方法の工夫改善に係る、学校評価についての基本的な考え方や、9年間教育を推進していく上での評価の在り方と具体的な展開等についての研修を、講師等を招聘して実施する。また、外部評価により、教職員と地域住民・保護者が現状と課題について共通理解を持ち、協力することにより教育活動や学校運営の改善を適切に行うことができるようにする。さらに、児童生徒・教職員・保護者が、実践の過程や成果（結果）の価値に気付く力を高め、それらを共有するようにしていく。

- (3) 児童生徒・地域の人材による異年齢集団の学習活動を実施する。

明郷タイム、学園体育祭、学園文化祭、学園駅伝大会など

- (4) 家庭学習ノートの取組を継続・深化する。